点をつなぐ

加藤千恵

Kato Chie

角川書店

点をつなぐ

加藤千恵
Kato Chie

角川春樹事務所

著者略歴

加藤千恵（かとう・ちえ）
1983年北海道生まれ。立教大学文学部日本文学科卒業。2001年、歌集『ハッピーアイスクリーム』で高校生歌人としてデビュー。2009年には『ハニー ビター ハニー』で小説家デビュー。現在、小説、短歌にとどまらず、詩、エッセイ、漫画原作など、幅広い分野で活躍している。著書『いろごと』『こぼれ落ちて季節は』『卒業するわたしたち』『あとは泣くだけ』『その桃は、桃の味しかしない』『誕生日のできごと』ほか。

© 2015 Chie Kato　Printed in Japan

Kadokawa Haruki Corporation

加藤千恵
点（てん）をつなぐ
*
2015年1月18日第一刷発行

発行者 角川春樹
発行所 株式会社 角川春樹事務所
〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 イタリア文化会館ビル
電話03-3263-5881（営業） 03-3263-5247（編集）
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。

定価はカバーおよび帯に表示してあります。落丁・乱丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-7584-1253-7 C0093
http://www.kadokawaharuki.co.jp/

点をつなぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

いつのまにか眠っていたらしい。着陸案内のアナウンスによって目を覚ました。目の前のシートポケットに入れておいたはずの、スープを飲み干して空になった紙コップも片付けられている。

「着陸に際し、気流の悪い中を通過することがありますが、飛行には影響ございません」

アナウンスの言葉どおり、飛行機はやけに揺れる。少しすると、窓の外に陸地が見えてきた。白に包まれた風景。高校卒業までの十八年間を過ごしてきた場所。

こうして上空から町を眺めていると、ぽつりぽつりと雪にまつわる思い出が胸をかすめていく。冬には毎日のように雪が降っていたこと。秋頃、雪が降る前には必ず雪虫と呼ばれる虫が発生して、自転車をこいでいる顔に当たって不愉快だったこと。学生時代にはスキーの授業が

あったこと。

ただ、不思議なことに、思い出をいくつ浮かべても、懐かしさというものはあまり生まれない。それよりは、今の自分がいる位置を改めて意識するような感覚が強い。

轟音と揺れとともに、飛行機が着陸する。白い景色の中で、滑走路だけはアスファルトをむき出しにしている。後方から、着いたねー、と嬉しそうな子どもの声がする。

シートベルト着用のサインが消されるやいなや、乗客たちは立ち上がり、上部の収納棚に入れていた荷物を取り出していく。隣に座っていた人がスペースを空けてくれたので、わたしも慌ててバッグを取り出した。

実家に多少洋服を残していることもあり、荷物は機内持ち込みできるサイズのボストンバッグに詰め込んできたので、預けていない。帰省時はいつもそうだ。

流れにまじって、機内から空港への道のりを進む。出発地の羽田空港と比べれば、ずっと小さな空港なので、その分移動は楽だ。まだ動き出していないベルトコンベアの横で、荷物を待っている人たちを横目に、出口へと進む。

少し離れたところに、父はいた。わたしを見て小さく、本当にごくわずか、片手をあげた。母からは、美容室に行くからお父さん一人で迎えに行くね、というメールをあらかじめ受け取

っていた。

「少し遅れたんだな、到着」

「ごめんね。待たせちゃって」

久しぶりの会話に、どこかぎこちなさを感じてしまうのは、わたしのほうだけだろうか。ペースをつかみかねている。前に会ったのは夏休みだったから、四ヶ月ほど前だ。

「どれ、持つよ」

父はそう言うと、返事を待つこともなく、わたしの手からボストンバッグを取り上げるようにして持った。

二歩ほど前を歩く父の後ろ姿は、夏に見たときよりも、老けたように感じる。白髪が増えたのかもしれない。無理もない。もう六十歳になったのだ。

自分の二十八歳という年齢もうまく飲み込めていない感じがするのと同じように、父親の六十歳という年齢にも違和感をおぼえる。毎年一つずつ歳を重ねていくという単純な事実が、理不尽に思えてしまう。時間の流れはいつからこんなにも速くなっていってしまったのだろう。それは仕事をしていても感じることだ。ずいぶん遠く思っていたはずの数ヶ月先の未来に、あっというまに追いつかれている。

六十歳の父が、二十八歳のわたしの重たい荷物を持つことは不自然ではないだろうかと思う一方でまた、取り返すことは、父を傷つけてしまう気がして、おとなしく後をついていく。

外に出たとき、思わず、さむっ、と声が出た。

空港前の電光掲示板の温度計は、氷点下を示している。顔などの露出している部分はもちろん、身体全体に、コートを通り抜けて、寒さが突き刺すように感じられる。

外を歩き出してすぐ、自分の履いているブーツが、ここには合わないことを知った。東京で買ったものだからだ。ところどころ凍ってツルツルになっている雪道を歩くと、今にも転びそうになってしまう。こうした道を歩くのに必要なのは、慣れではなく、適切な靴なのだ。すっかり忘れていた。

「なんだお前、滑るのか」

振り返った父が、危なっかしい歩き方をしているわたしに気づき、そう言って少し笑った。うん、とわたしも笑って答える。父が危なげなく歩いていることに、頼もしさというより、安堵をおぼえた。

なんとか転ぶことなく、紺色の乗用車の助手席に乗り込んだ。

わたしのボストンバッグを後部座席に置いてから、運転席に座った父は、ダッシュボードの

上に置かれていた眼鏡を、かけていた眼鏡と取り替える。
「新しい眼鏡なの？」
「ああ。運転中はこっちにしてるんだ。老眼がひどくてダメだ」
父の老眼も、今に始まった話ではない。わたしが高校生だった十年ほど前にはもう、話題にあがっていた。それでも老いを意識してしまうのは、高校時代とは異なり、たまにしか会うことがないせいかもしれない。
車が走り出してからは、しばらく二人とも黙っていた。ラジオもつけていないので、車内は静かだ。飛行中、切っていた携帯電話の電源をつけた。メールも電話も入ってはいないようだった。
「仕事は忙しいのか」
「まあ、ぼちぼち」
「相変わらず帰りは遅いのか」
「そうだねー。大体いつも九時くらいまで仕事して、家に帰るのは十時くらいかな」
「そんなに帰りが遅いのに、わざわざ遠いところに住まなくてもいいのにな」
車内には二人だけなのに、別の誰かに向けるようにして、父は言う。こういう話し方は、

時々あることだった。

違うよ、とわたしは思う。

別にわたしは好きで職場から遠いところに住んでるわけじゃないよ。ただ職場の近くは家賃が高いし、今の家は、前の職場である店舗からはすごく近かったの。そもそも東京だと、一時間くらい通勤にかかるのは、わりと普通のことだよ。中には新幹線で通勤するような人もいるっていうし。そりゃあこっちだと、一時間の通勤時間なんてありえないかもしれないけど。

思いを口に出さないのは、もう既に何度も話したことだからだ。父にも母にも、ちゃんと説明した。それでもこうして帰ってくるたびに、同じようなことを言われるのだ。きっとそのときはわかっても、根本では理解できないのだろう。両親の理解力のなさというより、環境の違いなのだ、きっと。

黙ったまま、窓の外に目をやって、流れる景色を見る。道路の端のそこかしこに雪山があり、広い道を圧迫している。運転免許は持っているけれど、最後に運転したのがいつだったか思い出せず、もはやペーパードライバーとなっている。スリップの体験談を聞くたび、雪道の運転は余計に恐ろしくなってしまう。

対向車線側にコンビニが見えて、わたしはあることを思い出し、父に言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ねえ、家に帰るまでにコンビニ寄ってもらってもいい？　あ、できたらテンバードがいいな」

テンバードは、このエリア限定のコンビニで、オリジナルスイーツも豊富なはずだ。ラインナップを見たいし、味も確かめたい。できたらオリジナル飲料も買っていこう。

父は質問を返してきた。

「甘いもの買うのか？」

「そのつもりだけど」

意図がわからないまま答えると、さらに言われた。

「だったら、昨日母さんがたくさん買ってたぞ。みのりがいろいろ食べるだろうから、って。冷蔵庫に入ってるよ」

「え」

声が出たのは、嬉しさからではなかった。むしろ逆の感情に近い。一体どのお店で、どんなものを買ったのだろうか。冷蔵庫の棚に並んでいるであろうスイーツ類の中に、わたしが望むものが入っているわずかな可能性を信じたい気持ちだった。

車の中で父が話してくれたように、冷蔵庫には母が買ってきたといういくつものカップスイーツがあった。プリン、パンナコッタ、チョコレートムース、杏仁豆腐。どれもフラモスの商品であることを示すシールが付いていた。

思いが届かなかったことを知った。

フラモスは全国シェア一位のコンビニで、当然のことながら、東京でもよく見かける。わたしのマンションの最寄り駅近くにも店舗がある。だからどれも、何度となく買ったことのある商品だ。

それらの見知った味のスイーツを食べているときや、冷蔵庫を開けて並ぶカップ類を見たとき、多分、中学時代や高校時代のわたしのほうが強かったんだろうな、としみじみと思ってしまう。こんなの違うじゃんとか、余計なことしないでとか、思いをそのまま口に出せたのは、親の老いや弱さについて考えることなんてなかったからだ。今とは違う。

そして実家で過ごす時間は、どうしてこんなに眠気に襲われるものなのだろう。帰省した当初の三十日と三十一日は、大掃除の手伝いをさせられているうちに過ぎていき、元日はほぼ眠っていた。普段の睡眠不足を取り戻すかのような勢いだった。

起きている時間は、もっぱら母の話に付き合っていた。近所の人がどうしたとか、親戚がど

こに出かけたとか、習い事でこんなことがあったとか、相づち以外は必要とされていない話題ばかりだ。

ただ、もはや母が趣味で育てている観葉植物置き場となっている、以前使っていた自分の部屋にいるときのほうが、今一人暮らしをしている東京の部屋にいるときよりもよく眠れるのは、自分の身体が、まだ東京に馴染めていないのだと知らされているようで苦しい。大学進学をきっかけに上京して、もう十年も経つというのに。

そして二日の夕方である今、さっき家を出て、母の運転する車で、駅の近くまでやってきた。飲み会のためだ。

この町にいると、車なしでは移動できない。バスもわずかだし、電車も近距離移動には向かない。ペーパードライバーのわたしは、まるで役立たずだ。両親がやけにわたしを子ども扱いするのは、そのせいもあるかもしれないと感じてしまう。

母に礼を言い、指定された店の中に入ると、そこには二人の友人がいた。一人の横には、幼児が座っている。男の子。確か、聖くんという名前だったはずだ。

「久しぶりー」

そう言いながら近づいていくと、久しぶりー！　とこちらを上回る勢いの声が二人からあが

った。
「今年は帰ってこられたんだねー、よかったね」
「うん、そうなの。それより大きくなったね」
聖くんはわたしの顔をちらりと見たものの、母親にしがみつくように座っていて、離れようとしない。
「ほら、みのりちゃんだよ。挨拶は？　なんて言うの？」
「……こんばんは」
消え入りそうな声で言われて、こんばんは、と明るく返した。
「しゃべれるんだね。前見たときは赤ちゃんだったのに」
「三歳だからねー」
「もうそんなになるのかあ」
むしろ独り言に近い思いの吐露だった。前に会ったとき、聖くんは何ヶ月だっただろうか。
もうひとりの友人に訊ねる。
「直実のとこの子はいくつになったの？」
「うちは今八ヶ月。今日は旦那に見てもらってる」

「そうなんだ、旦那さん優しいね」
「平日は、帰ってきてお風呂入って寝るだけだけどね。帰りも遅いから仕方ないんだけど」
「普段は帰ってくるの何時くらいなの？」
「九時過ぎとか」
「わー、それじゃあ、直実が大変だね」
二人の友人の会話を耳にして、戸惑いが生まれた。わたしの場合、九時過ぎに家に着いたときには、早く帰ってこられたと思うとは言い出せそうにない。
それから立てつづけに友人たちが合流し、男女まじった十人ほどが揃った。うち三人が子どもを連れている。乾杯を済ませて、みんなで話し始める。とはいえ十人もいれば、話題はそれぞれのテーブルで分割されてしまう。
ちょうどテーブルとテーブルの境目に座っていたわたしは、左側の話にも、右側の話にも加わるようにしていたけれど、どちらの席でも、交わされる話題は似たようなものだった。
結婚、配偶者の欠点、育児の悩み、保育園、マイホーム、義理の家族との関係性。
興味をまったく持てないわけではないけれど、聞いているうちに、どんどん距離を感じてしまう。目の前の友人たちに流れている時間と、自分に流れている時間が、異質なものみたいに

感じられる。共通点を探そうとすればするほど、自分だけが部外者のように思えた。同じ教室で、同じ話題で、同じように笑ってきた子たちなのに。

相づちばかりで、言葉を発していないわたしに気づいたのか、一人が訊ねてきた。

「ねえ、みのりは最近どう？　東京で彼氏いるの？」

「え、ううん。全然だよ」

突然話を振られた驚きで、早口になってしまう。

「えー、ほんとー？　なんかあやしいなあ」

「ほんと。好きな人もいないし」

「そうなんだ。じゃあさ、立川（たちかわ）と付き合っちゃえば」

「ええ、おれ？」

立川の声のトーンが、やけに高い大げさなものだったことで、場に笑いが生まれた。

立川は今、塾講師をやっている。同級生の中では珍しい。ここに残っている同級生たちは、たいてい、公共施設か病院か店舗に勤めている。この町には、いわゆる普通の会社というものが少ないのだ。今日のメンバーは、ふだんはここから特急で一時間半ほどかかる町に住んでいる人が多いのだけれど、そこでもやっぱり看護系の職業についたり、公務員になったりするパ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.